

死兆、死の欺き、死のヨーガ —初期中世期インドの死の現場の一例—

杉木 恒彦

1. はじめに

インドではヴェーダ期から宗教や医学などの諸体系の中で、死に関する様々な思考が試みられた。その試みの中で、ヴェーダ期、古典期を経て中世期までには、ある死の実践の体系が整備される。この体系は以下の3つの要素から構成される。

- ①死兆 ([a]rishta, mrtyucihna, mrtyalakshana)
- ②死の欺き/克服 (kalavancana, mrtyuvancana, [a]kalamrtyuvancana, mrtyunjaya)
- ③死のヨーガ (utkrantiyoga)

①死兆とは、死が迫っていることを示す徴である。②死の欺きとは、望まない死を回避する実践である。③死のヨーガとは迫り来る自分の死を前向きに受け入れる実践である。なぜなら、この実践によって、死が良き転生や解脱を得る契機となるからである。この体系は、細部の相違こそあれ、宗教の相違や教派の相違を越えて、初期中世期の聖典に広く見い出される。この体系はインドに侵入した一部のムスリム（スーフィー）たちにも受け入れられた¹⁾。本稿は、初期中世期の宗教の大伝統であるタントラ（ヒンドゥー教と仏教の秘教的伝統）とプラーナ（ヒンドゥー教叙事詩）の聖典、およびアーユルヴェーダ医学の文献などを主な資料として、この体系を通して見える初期中世期インドの死の現場を垣間見たい。

2. 死兆

死ぬ時には死兆が現れる²⁾。したがって、この体系に依拠するアーユルヴェーダの医師や、ヒンドゥー教や仏教等の宗教的实践者にとっては、死兆が危篤判定の際の重要な目安となる。死兆は当事者の心身の重度な不調の徴の一種であるという定義もなされるが³⁾、それは当事者の心身以外の人や物にも現れることがある。医学的・宗教的な個々の文献による分類およびそれらの思考法を可能な限り尊重しつつ、死兆の包括的分類を試みるならば、以下のようになる⁴⁾。

[1] 患者自身に現れる死兆

① 覚醒時に現れる死兆

② 夢の中に現れる死兆

③ 瞑想中に現れる死兆

〈1〉 身体の内々に現れる死兆

〈2〉 身体の外々に現れる死兆

[2] 患者の家への往診の際に、医師の周囲に現れる不吉な出来事としての死兆

[3] 占術に基づく死兆

予想できることではあるが、上記3つの分類のうち、[1]と[2]の型の死兆はアーユルヴェーダ医学の体系に、[1]と[3]は宗教的实践者の体系に観察できる。また占術師の体系では[3]が主に説かれる。このように、死兆というアイデアを共有するとはいえ、それぞれの分野の専門家の関心や仕事内容との関連から、説かれる死兆の種類には相違が見られる。また、同じ種類の死兆を共有するとしても、異なる分野の間では、さらに同じ分野の専門家たちの間でさえ、死兆の判定の基準は完全には統一されていなかったろう⁵⁾。

このような理由から単純な比較や分業の体系の解明はできないが、医学的文献と宗教的文献それぞれの分野の体系における、死兆の出現が持つ意義の相違を検討することはできる。死兆とはただ死が近づいていることにより生じる、明白な病因論的説明のつかない現象であるという定義が、医学的文献および宗教的文献双方に見られる⁶⁾。インドでは死はしばしば「時間」と同義の人格神であり (Kala神, Kali女神, Yama神, Yamantaka神, Yamari神等)、

あらゆる動静物から成る輪廻全体を支配する原理でもあり、穢れの根源でもある。死とは——患者が過去に積んだ業と関連しながら——そのような死兆によりもたらされるとしばしば説明される⁷⁾。死およびそれを告げる死兆の出現それ自体は、病因学とは次元の異なる宗教的な出来事なのだ。ゆえに、死兆の出現は、病因学の専門家であるアーユルヴェーダ医学の医師たちにとっては、治療の中止と患者の放棄を決定する契機であるのに対し⁸⁾、宗教的実践者にとっては、後述するように、死を欺く実践や、死のヨーガの実践を開始する契機なのである。

3. 死の欺き

死兆が出現すると、ある者たちは死の欺き（あるいは死の克服）の実践を行う。死の欺きの実践は、治癒術や延命術の延長上にあると解釈することができる。健康回復や延命の実践は、ヴェーダ期からインドで盛んに説かれてきた。100歳まで生きることがしばしば理想とされるサンスクリット文化にあっては、長寿への願望は相当なものであったろう。

だが古代末期から中世期には、真理体験——それが究極実在との一体化であろうと、空の悟りであろうと——に基づいて、死という識別へのとらわれ（死への恐怖はその産物である）から自由になり、それにより死を欺くという実践が多く説かれるようになる。そもそも生に対する死という識別は、輪廻という分節化の世界において非永続的な身体と意識を持つ者にのみ生じ得る。たとえその身体が輪廻の中にあっても、あらゆる分節化が消滅した永遠なる絶対の領域に意識をリンクさせた者にとっては、そのような識別はもはや存在しない。諸文献はこの実践によって迫り来る死を実際に回避できると暗示する。死という識別へのとらわれを捨てた者を、死は攻撃することができないというのだ⁹⁾。また、かりに（この実践を行ったにも拘わらず）死ぬとしても、上記のような意識状態にある者は、恐れることなく死を迎え、解脱するため、最終的には死から永遠に解放されるという¹⁰⁾。この体系では、死の欺きあるいは死の克服とは、生に対する死という識別を放棄するという認識論上の事柄と、輪廻内の出来事としての死を回避するという存在論上の事柄の相互連関を土台としている。

死を欺くための具体的な実践方法は非常に多様である。だが、細部の相違こそあれ、宗教や教派の相違を越えて比較的広く受け入れられていた実践の基

本構造の一例を指摘することはできる。それは、自身の体内あるいは体外に月あるいはそれと同機能を有するものをイメージし、そこから陶酔性を持つ甘く冷たいアムリタ（不死性の甘露）を流出させ、自身の身体内部を満たすと瞑想することにより、死を欺くというものである¹¹⁾。この瞑想は、ヴェーダ期における祭式を構成する最重要要素の一つであるアムリタ——満月や新月の日に神々や死者たちが飲む、天上の月に貯蔵された不死性の甘露アムリタ——の応用である。仏教のある伝統では、頭部から発せられ、空性の至福体験を誘発する秘的な体内分泌液であるアムリタは、しばしば菩提心（悟りの心）のシンボルであると見なされた。修行者はこのアムリタが体内の中樞を流れると瞑想することにより、悟りという精神状態を得るのである。ヒンドゥー教でも、このような内的なアムリタはしばしば最高実在と関連付けられた¹²⁾。

4. 死のヨーガ

死のヨーガは、臨終時にある者——すなわち、死兆が出現した者、あるいは死の欺きの実践を行っても死兆が消えない者——が行う実践である¹³⁾。自分が死ぬことによりその実践は完了する。死のヨーガがもたらす死は良き転生あるいは解脱の可能性を持つものなので、実践者は死に対する恐れと怒りと落胆を捨て、自分の死を前向きに受け入れなければならない¹⁴⁾。だが、死兆が出現していないにも拘わらず、あるいは死兆が出現したとしても死の欺きの実践によりその死を回避できる余地があるにも拘わらず、自ら死のヨーガを実践したり、あるいは他人にその実践を行わせたりする者は、殺生や最高神への冒瀆を犯した大罪者として動物や地獄に転生することになる。ゆえに、この実践において、死兆の観察は極めて重要である¹⁵⁾。

死のヨーガの成功の条件に関して、大きく以下の2つの立場の存在を指摘できる。

- (1)精神的修練がすでになされていなければ、死のヨーガによって良き来世や解脱を得ることはできないという立場¹⁶⁾
- (2)どんな罪悪を犯しても、死のヨーガにより良き来世や解脱を得られるという立場¹⁷⁾

(1)は死兆が出現する以前から、実践者の生き方を道徳的・宗教的に方向付け

ていく立場である。(2)はそのような長期的修練と同等の効果を死のヨーガに凝縮させる立場であり、実際、この立場は反保守的な傾向を持つ文献に記される¹⁸⁾。

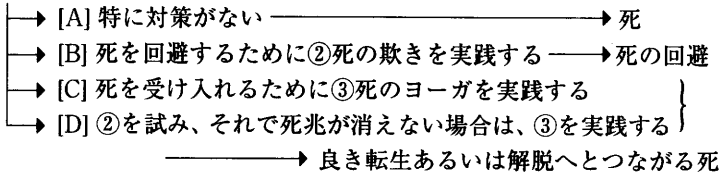
死のヨーガには多くの方法がある。だが、細部こそ異なれ、宗教や宗派の相違を超えて最も広く観察される実践の基本型を抽出することはできる。この実践の型においては、実践者は背筋を伸ばして坐し、意識を含む知覚の制御と、身体内をめぐる生命風の動きの制御を行う。制御されたその生命風は心臓に宿る魂を動かす(あるいは魂と同一視される生命風がゆっくりと移動を始め)、身体の孔を通して魂を身体の外へと出す。一種の抜魂術である。魂が身体の中のどの孔から抜け出すかは死に際して重要である。なぜなら、それにより来世の境遇が決まるからである。すべての文献に明記されるわけではないが、概して、頭頂にある孔から魂が抜け出すならば、解脱する、あるいは非常に好ましい境遇に生まれ変わると考えられている。(ゆえに、実践者は望みの孔以外はすべてあらかじめ瞑想により塞ぐべきことがしばしば規定される。)¹⁹⁾ この実践の最中、実践者は究極実在や最高神や真理を強く思うべきこともしばしば規定されるが、これは死の時に心に思い描くものへと人は転生するという考え方²⁰⁾と関連している。死を迎える時に何を心に思い描くかは重要であり、この意識状態が魂の動きにも影響を与える。死兆の出現により徐々にリアルになる自分の死と向かい合う極限状態の中で、究極実在等への傾倒を通して、実践者はそこへと至ろうとするのである²¹⁾。

聖地こそが、良き転生や解脱を目指して人が死を受け入れるに最適の場所であるという考え方がある。なぜなら、聖地は究極実在や最高神に近い場所だからである²²⁾。ヴァーラーナシーは今もなお、そのような聖地として多くの人々に讃えられている。だが、異なる考え方もある。上記のような死のヨーガは、死を受け入れようとする者自身がしばしば師の誘導のもと実践する(よって、師が彼の死の看取り人となることがしばしばである)。これに加え、優れた師は究極実在や最高神あるいは仏に近い存在であると考えられる傾向もある。これらのことから、死を受け入れるのに最適な場所は必ずしも特定の地理上の聖地ではなく、優れた師のいる場所であり、優れた師のいる場所こそ聖地なのだという考え方も主張される²³⁾。

5. まとめ

以上論じてきたように、①死兆、②死の欺き、③死のヨーガの組み合わせとして、以下の[A]から[D]の4つの型を指摘することができる。これらのうち、[A]は特に医学的文献、[B] [C] [D]は特に宗教的文献の中に見出せる。

①死兆の現れ=死が迫っていること



上記の体系が、サンスクリット文化の人々の代表的な実存的願望とも言える長寿や良き来世あるいは解脱への切なる願いと密接であることは言うまでもない。

また、特に上記[B] [C] [D]においては、自分の死と対峙する者は、自らの身体を非現世的な場所——それが特定の地理上の聖地であれ、師のいる場所であれ——に定める傾向が見られた。それと相応するように、死と対峙する者の意識は、輪廻を超克した真理——教派によってその超克の仕方は様々であるにしろ——へ向かう傾向が見られた。いわゆる四住期の考えにおいても、人は人生の終盤には家を出て森林等で世俗にとらわれない日々を送り、死を迎えることが理想とされている。死との対峙は現世放棄という文脈の中で考察されることがしばしばであったが、上記の死の方法の確立は、このような立場からのものである。

[略号・一次文献]

Ms: Sanskrit manuscript

Tib: Tibetan translation

Ashtangahrdaya: K.R. Srikandha Murthy, *Vagbhata's Ashtangahrdaya: Text, English Translation, Notes, Appendix and Indices* vol.I, Krishnadas Academy, 1995.

- Kubjikamatatantra: T. Goudriaan and J.A. Schoterman, *The Kubjikamatatantra—Kulalikamnaya Version*, *Orientalia Rheno-Traiectia* XXX, 1998.
- Krtyakalpataru: K.V. Rangaswami Aiyangar, *Krtyakalpataru of Bhattalakshmidhara vol.XIV—Mokshakanda* (Gaekwad's Oriental Series No.CII), Baroda Oriental Institute, 1945.
- Cakrasamvaratantra: Janardan Shastri Pandey, *Cakrasamvaratantram with Vivrti Commentary of Bhavabhata*, CIHTS, 2002.
- Catushpithatantra: Ms, The National Archives (Kathmandu) Reel No. B26/23.
- Catushpithatantranibandha: Ms, The National Archives (Kathmandu) Reel No.B112/4, Tib, Ota No. 2478.
- Carakasamhita: Priyavrat Sharma, *Caraka Samhita: Agnivesa's treatise refined and annotated by Caraka and redacted by Drdhabala* (Jaikrishnandas Ayurveda Series 36), Chaukhambha Orientalia, 1996 (Fourth edition).
- Jayadrathayamala: Ms, The National Archives (Kathmandu) Reel No. A152/9.
- Dakarnavatanttra: Ms, The National Archives (Kathmandu) Reel No. D40/6.
- Dvikramatattvabhavananamamukhagama: Tib, Ota No. 2716.
- Brahajataka: Swami Vijnananda alias Hari Prasanna Chatterjee, *The Brihajatakam of Varahamihira* (Sakred Books of the Hindus, vol.12), Panini office, 1912.
- Bhagavadgita: Swami Gambhirananda, *Bhagavadgita with the Commentary of Sankaracarya*, Advaita Ashrama, 1991.
- Markandeyapurana: *The Markandeyamahapuram*, Nag Publishers, 1984.
- Malinivijayottaratanttra: Madhusudan Kaul, *Sri Malinivijayottaratanttram*, Butala, 1984.
- Yoginisamcaratantra: Janardan Shastri Pandey, *Yoginisamcaratantram with nibandha of Tathagatarakshita and Upadesanusarinivyakhya of Alakakalasa*, 1998.
- Lingapurana: J.L. Sastri, *Linga Purana with Sanskrit Commentary Sivatoshani of Ganesa Natu*, Motilal Banarsidass, 1980.
- Vajradakatantra: Ms, The Royal Asiatic Society of Bengal (Calcutta) Sastri catalogue No.72.
- Vajradakatantravivrti: Tib, Ota No. 2131.
- Vayupurana: *The Vayumahapuram*, Nag Publishers, 1983.
- Sarnghadharapaddhati: Peter Peterson with an Introduction by Satkari Mukhopadhyaya, *Sarnghadharapaddhati Being an Anthology of Sanskrit Verses*

-
- Compiled by Sarngadhara* (The Vrajajivan Prachyabharati Granthamala 25),
Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1987.
- Sivatattvaratnakara: Vidwan S. Narayanaswamy Sastry, *Sivatattvaratnakara of
Basavaraja of Kelada vol.1* (Oriental Research Institute Publications Sanskrit
Series 108), Oriental Research Institute, University of Mysore, 1964.
- Sivapurana: *The Sivamahapuranam Part II*, Nag Publishers, 1986.
- Samputatantra: Ms, London Cowell & Eggiling 37.
- Samvarodayatantra: Shin'ichi Tsuda, *The Samvarodayatantra—Selected Chapters*,
Hokuseido Press, 1974.
- Siddhayogesvarimata: Judit Toerzoek, *The Doctrine of Magic Female Spirits A
Critical Edition of Selected Chapters of the Siddhayogesvarimata (tantra) with
annotated translation and alalysis* (D.Phil thesis), Merton College, Oxford, 1999.
- Skandapurana: *The Skandamahapuranam*, Nag Publishers, 1987.

[二次文献]

- Eino, Shingo 2004. "The Signs of Death and Their Contexts," *Three Mountains
and Seven Rivers: Prof. Musashi Tachikawa's Felicitation Volume*, Edited by
Shoun Hino & Toshihiro Wada, Motilal Banarsidass, p.871-886.
- Gopani, A.S. 1945. *The Rishtasamuccaya of Durgadeva, Critically edited with
Exhaustive Introduction, English Translation, Sanskrit Chaya, Notes, Appendix,
Indices, etc.*, Bharatiya Vidya Bhavan.
- Shastri, J.I. (& a Board of Scholars) 1969. *The Siva Purana Part III* (Ancient
Indian Tradition and Mythology vol.2), Motilal Banarsidass.
- 1973. *The Linga Purana Part I* (Ancient Indian Tradition and Mythology
vol.5), Motilal Banarsidass.
- Tagare, G.V. 1987. *The Vayu Purana Part I* (Ancient Indian Tradition and
Mythology Vol.37), Motilal Banarsidass & UNESCO.

- 1) Eino 2004, pp.871 etc.
- 2) Carakasamhita, indriyasthanana 2.4-5. Catuspithatantra (& Catuspithata-
ntranibandha), Ms 73b4-b5. Markandeyapurana. 40.1. Vajradakatantra (&
Vajradakatantravivrti), Ms 58b4. Vayupurana (& Tagare 1987), 19.1.
Samputatantra, Ms 115b2. Sarngadharapaddhati, 162.3. Sivattvaratnakara,

5.62. Sivapurana (& Shastri 1969), 5.29.18cd. Skandapurana, 4.1.42.2.

3) Ibid. 1.6-7.

- 4) [1]の〈1〉身体の内と〈2〉身体の外という分類は、中世期、死兆のみならず広く宗教的实践においてしばしば重視される分類である。身体の内とは、人の身体を覆う皮膚およびその内部（したがって肉体はもちろん精神も含まれる）の領域を指し、身体の外とは、その外部の領域を指す。議論を死兆に限定して具体例をあげれば、「覚醒時あるいは夢の中で金色あるいは銀色の大小便をしたり、大小便と同時にくしゃみが出れば死は近い」([1]—①あるいは②—〈1〉) (Kṛtyakalpataru, mokshakanda 25, p.248, 1.12-13. Dakarnavatāntra, Ms 23a7-a8. Markandeyapurana, 40.4. Vayupurana [& Tagare 1987], 19.4. Sarngadharapaddhati, 162.6. Samvarodayatantra, 19.3.)、「夜に虹が見えるならば余命3ヶ月等である」([1]—①—〈2〉) (Vayupurana [& Tagare 1987], 19.8, 19.20. Markandeyapurana, 40.10, 40.23. Sarngadharapaddhati, 162.12. Sivattvaratnakara, 5.78. Sivapurana [& Shastri 1969], 5.29.24. Samvarodayatantra, 19.11.)、「夢の中で黒い男たちに囲まれたり杖で攻撃されるならば余命6ヶ月等である」([1]—②—〈2〉) (Kubjikamatatantra, 23.27. Markandeyapurana, 40.20. Vayupurana [& Tagare 1987], 19.17. Sarngadharapaddhati, 162.22.)、「瞑想の中で神的存在の身体の各部が欠けていたら瞑想者の死は近い」([1]—③—〈1〉あるいは〈2〉) (Jayadrathayamala, Ms shatka 3.193a3-a8. Malinivijayottarantra, 16.48-52.)とあったようになる。

[2]は医師の往診というコンテクストに関連する死兆である。具体的に言えば、患者自身ではなく、医師のもとに往診の依頼に来た使者の不吉相、医師が患者の家に往診に行く道中に見た不吉な出来事、医師の往診中に患者の家の中に生じた不吉な出来事を指す (Carakasamhita, indriyasthana 12.9-24, 12.25-31, 12.32-39.)。逆にそれらに吉相が現れれば、それらは患者の回復を示す徴である (Ibid. 12.67-70, 12.71-79, 12.80-86)。

[3]は患者自身や医師・実践者自身ではなく、星や暦やその他の占術的媒体との関連から導き出される死兆である。

- 5) Dakarnavatāntra (Ms 23a3-a5)は、死兆として規定されている事象が現れても、それが重度の危機の徴なのか、あるいは軽度のものなのかを実践者は見極めなくてはならないと主張する。たとえば、「舌が黒くなる」「舌が麻痺する」「舌に激痛がはしる」ことは医学・宗教そして教派の相違を越えて広く死兆と見なされていたが (Kubjikamatatantra, 23.41. Kṛtyakalpataru,

- mokshakanda 25, p.249, 1.17-18. Catuspithatantra [& Catuspithatantranibandha], Ms 6b1. Jayadrathayamala, Ms shatka 3.192b4. Dakarnavatana, Ms 87a8. Markandeyapurana, 40.26. Vajradakatantra [& Vajradakatantra-ivrti], Ms 57b3. Vayupurana [& Tagare 1987], 19.23. Sarnghadharapaddhati, 162.25. Sivapurana [& Shastri 1969], 5.29.10.)、ある者はそのような舌の異常をつねに機械的に死兆と診断し、別の者はそれをケースによっては病因論的に説明可能な一時的異常であると診断したということもあり得るのである。
- 6) Carakasamhita, indriyasthana 1.6-7. Ashtangahrdaya, sarirasthana 5.4-5. Sivattvaratnakara, 5.63-64.
- 7) この考え方の延長として、そのような死の女神と同一視される体内の秘的な中枢脈管の寿命（100年）により死が説明されることもある。なお、仏教のある伝統では、死兆の出現の間接的原因を、体内各部を走る二次的脈管の切断と定義する傾向がある。中枢脈管の寿命が尽きる前に、二次的脈管の切断が生じるのである。Catuspithanibandha, Ms 19b4-20b4. Vajradakatantra (& Vajradakatantra-ivrti), Ms 57b1-b7. Dakarnavatana, Ms 87a6-b3.
- 8) Ashtangahrdaya, sarirasthana 5.2-3, 5.129-130. Carakasamhitaの関連箇所については、Eino 2004, pp.876を見よ。また、死兆に対するこのような態度により、在俗者である医師たちは死の穢れを避けることもできたであろう。
- 9) Dakarnavatana, Ms 24a6-b1. Malinivijayottaratantra, 21.20-34. Sarnghadharapaddhati, 163.17-21. Samvarodayatantra, 19.26-27b.
- 10) Skandapurana, 4.1.41.185-189, 4.1.42.40-60.
- 11) Catuspithatantra (& Catuspithatantranibandha), Ms 74a4. Dakarnavatana, Ms 22b3-b7. Malinivijayottaratantra, 16.53-54, 21.20-36. Sarnghadharapaddhati, 163.8-26. Sivapurana (& Shastri 1969), umasamhita 27.26-33, umasamhita 27.34-37. Samputatantra, Ms 116b4. Siddhayogesvarimata, 11.1-12. この瞑想方法は、死兆が現れた時、つまり死が迫っている時のみに限定されるわけではなく、通常の病氣治療にも応用される。たとえば、腕に異常がある場合は、腕にアムリタを流し込むと瞑想する (Malinivijayottaratantra, 16.55.)。
- 12) Sarnghadharapaddhati, 163.16-17.
- 13) 様々な要素を考慮すれば、まず死の欺きの実践を試み、それにより死兆を消せなかった場合にはじめて死のヨーガを実践するという手順をとる者も実際は多かったと推測できるが、それを明記する文献は、筆者が調査できた限りでは多くない。たとえば、Kubjikamatatantra, 23.16, 23.98-100b.

- 14) Kubjikamatatantra, 23.101c-102. Kṛtyakalpataru, mokshakanda 26, p.255, l.4. Markandeyapurana, 40.41. Lingapurana [& Shastri 1969], 91.36. Vayupurana [& Tagare 1987], 19.33ab. Sarngadharpaddhati, 162.1-2, 163.2cd.
- 15) Kubjikamatatantra, 23.104ab, 23.111. Catuspithatantra (& Catuspithatantranibandha), Ms 74b1-b2. Vajradakatantra (& Vajradakatantravivṛti), Ms 59a7-b1. Samputatantra, Ms 116b2. Samvarodayatantra, 19.38c-39.
- 16) Kubjikamatatantra, 23.128c-130b.
- 17) Catuspithatantra (& Catuspithatantranibandha), Ms 74a5-b1. Vajradakatantra (& Vajradakatantravivṛti), Ms 59b6-b7. Samputatantra, Ms 116a5-b2.
- 18) 保守的立場に親近感を示すSamvarodayatantraは、死のヨーガを説明する際に前注の諸文献（つまり(2)の立場をとる文献）の記述を借用するが、(2)の立場を明記する部分をカットして借用している。
- 19) Bhagavadgita, 8.5-16. Kubjikamatatantra, 23.112-125 (Eino 2004, pp.877も見よ). Catuspithatantra (& Catuspithatantranibandha), Ms 73b2-b5, 73b6-74a4. Dakarnavatatantra, Ms 52b9-53a3. Dvikramatattvabhavananamamukhagama, Tib 16b3-17a1. Lingapurana [& Shastri 1969], 1.91.37-45b (Eino 2004, pp.877も見よ). Vajradakatantra (& Vajradakatantravivṛti), Ms 58a3-a7, 59a2-a7. Sarngadharapaddhati, 163.1-7 (Eino 2004, pp.877も見よ). Samputatantra, Ms 115a1-b2, 115b3-116b4, 116b4-b5. Samvarodayatantra, 19.27c-38b (Eino 2004, pp.877も見よ). その他、Eino 2004, p.877が指摘するMahabharata, 12.305.17-21も同種の実践である。ある伝統の例えを用いれば、矢としての魂を、天上にイメージされた理想の境涯、あるいは宇宙的な究極実在という的にまっすぐ射当て、一体化させるのである（上記Sarngadharapaddhati）。
- 20) Bhagavadgita, 8.6. 類似の考え方は仏教のある伝統にも見られる。例えば、死の時の精神状態が鏡のようであれば彼は神に生まれ変わり、怒りの状態であれば阿修羅に生まれ変わり、弱々しい状態ならば餓鬼に生まれ変わる（Vajradakatantra [& Vajradakatantravivṛti], Ms 66a4-a7.）。
- 21) その他、ヒンドゥー教のある伝統では、死兆の現れた実践者は心を怒らせながら、恐ろしい雰囲気漂う森の中で高位の女神たちを召還し、自らの身体をその女神たちに食べさせることによって絶命し、解脱するという死のヨーガも説かれる（Kubjikamatatantra, 23.130c-145.）。これは、女神たちに対する自身の供犠である。あるいは、仏教のある伝統では、最高尊やその男女の神的な従者たちが様々な花や旗を手を持ち、様々な楽器と歌を奏でながら臨終の実践者を迎えに来て、天女たちの世界へと連れて行くという考え方もあ

る (Cakrasamvaratantra, 51.9-11. Yoginisamcaratantra, 17.10-14.)。先の死のヨーガと比較すれば、これらの死のヨーガは人格神による救い上げを重視する型である。

22) Lingapurana [& Shastri 1969], 1.91.73-76. Skandapurana, 4.1.41.185-189, 4.1.42.40-60.

23) Kubjikamatatantra, 23.104c-109b.

(すぎき・つねひこ 研究拠点形成特任研究員)